研究計画概要書

研究課題名	看護師のコミュニケーションスキルに関連する要因
研究責任者 （所属・職名・氏名）	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻臨床看護学講座 教授　安藤　詳子
研究分担者 （所属・職名・氏名）	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻　３年　長島みか
共同研究者 （所属・職名・氏名）	該当なし
研究事務局 （機関の名称・住所・連絡先）	名古屋大学大学院医学系研究科　看護学専攻　安藤研究室 住所:名古屋市東区大幸南１丁目１番20号 連絡先:052-719-1553
研究の意義・目的	〈意義〉 終末期において患者と家族は死への恐怖、様々な喪失や悲嘆など、多くの心理的な苦痛を経験する。このような患者と家族の心理的反応に適切に対応するためにも、終末期における看護師のコミュニケーションスキルは重要な技術である。過去の研究では、看護師はコミュニケーションスキルの難しい患者に対して敬遠したり、苦手意識をもっていても、笑顔や要求にあった対応に努めたり、ゆっくり話を聞こうなど、逃避せずに工夫してコミュニケーションを図ろうと努力しようと考えていることが報告されている。これらの研究からは、看護師は終末期におけるコミュニケーションに対する意識が高く、努力を行っていることが示唆されている。 そこで、今回はコミュニケーションスキル測定尺度を用いて分析することにより、がん患者家族に関わる看護師のコミュニケーションスキルに関連する要因について考察したい。 〈本研究の目的〉 がん患者家族に関わる看護師のコミュニケーションスキルに関連する要因を明らかにする。
分析の対象	全国の国指定および県指定の診療拠点病院のうち、緩和ケア病棟および呼吸器内科系病棟を有するがん診療連携拠点病院を対象施設とする。調査対象施設に勤務する緩和ケア病棟看護師と、一般病棟看護師約500名を分析の対象とする。
実施計画	研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士後期課程在学中の宇根底亜希子氏が実施した「がん患者の死が避けられないと知った家族への支援に関する調査」(倫理審査番号:18-133)のデータの一部を用いて分析する。上記研究の調査は以下の手順で実施された。全国の国指定および県指定のがん診療拠点病院のうち、緩和ケア病棟および呼吸器内科系病棟を有するがん診療拠点病院を対象施設とした。その２つの病棟に勤務する看護師を調査の対象とした。郵送法による無記名自記式質問紙法調査を実施した。調査項目は、対象者背景（性別、年齢、最終学歴、専門資格、取得資格、経験年数、所属病棟、研修会参加状況、看取り経験、ギアチェンジに関する考え)、医師との協働（Collaborative Practice Scales 日本語版)、

	患者とのコミュニケーションスキル測定尺度、死生観に基づくケアへの態度（FATCOD-B-J 尺度）、がん患者家族の”死と喪失の準備”に対する支援である。本研究では、対象者背景と患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の既存データを用いる。 データ提供、データ管理の手順については、個人情報の保護の方法を参照。 がん患者家族に関わる看護師のコミュニケーションスキルについて集計し、カイ２乗検定等を用いて対象者背景など関連要因を分析する。
研究期間	実施承認日から令和元年３月３１日まで
被験者などに対するインフォームド･コンセント	研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士後期課程在学中の宇根底亜希子氏が調査した匿名化された既存情報を用いる研究であり、個人を特定できず拒否機会を保証できないため、研究情報の公開のみ行う。情報公開は研究計画概要書を「保健学臨床・疫学審査委員会」ホームページに掲載して行う。
個人情報の保護の方法	使用するデータは、研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士後期課程の宇根底亜希子氏の研究にて収集された既存のデータで、両者の承認を得た。データは完全匿名化となっている。研究期間中は紙媒体とCD を名古屋大学院医学系研究科の安藤研究室（本館１階１０１号緩和ケアラボ）の専用の鍵付きキャビネットに保管し、研究期間終了後に１０年間保管して、紙媒体はシュレッダーにかけ、CD 等は破砕し、復元できないようにデータを完全に消去する。情報は厳重に管理し、研究以外には使用しない。卒論発表会などの研究成果の公開時には、対象施設などの公開は行わない。